『プーチンの過信、誤算と勝算　ロシアのウクライナ侵略』・後半

* 松島芳彦(共同通信)、早稲田大学出版、2022年8月15日。
* 今回は**プーチンの思想**と**核問題**に絞ってまとめました。

**まず、プーチンの思想について**

**1999年、首相プーチンのインターネット論文**

* 1999年12月31日、ロシアの民主化を推し進めたロシア大統領エリチンは辞任。エリチンは民主化を推し進めた反面、強引なｼ手法で民衆の支持を失い、さらに心臓疾患もあった。
* エリツィンの辞任に伴い、首相のプーチンが大統領代行に就任。のちに大統領選挙で正式に大統領に就任した。
* 米クリントン大統領はエリチンと良好な関係を築いてきおり、クリントンはエリチンを「ロシアの民主主義の父」とまで称えた。しかし、この「民主主義の父」は独裁者を大統領にしてしまった。
* 大統領代行となったプーチンは国際的には「Putin, Who?」であり、ロシア国内でも選挙なしで大統領代行となったためプーチンはみずからの政治方針を語る必要があったため、エリチン辞任の前日プーチンは論文をインターネットに公開した。ここにはプーチン政治の原点が語られている。
* ロシア社会は1917年の共産革命に伴う内戦と1991年のソ連崩壊により分裂状態になった。われわれは今2回目の分裂で苦しんでいる。
* 伝統的な価値観に立ち返るべきだ。つまり、ロシアの大国性、国家の至上性、愛国心である。
* 大国性とは何か。ロシアは過去も未来も地政的にも経済的にも文化的にも本質的に「大国」である。
* 国家の至上性とは何か。社会や個人に対して国家が絶体的な価値を有しているのだ。ロシアは米英等の複製には決してならない。なぜなら、米英等においては国家の価値が低い。ロシアは違う！　国家は絶対的な価値を有しているのだ。国家は秩序の源泉である。
* 愛国心とは何か。国民一人一人が主体的に国家の至上性を支えるのか愛国心だ。
* この特徴がロシアの全歴史を通じて国民の気質と国家の政治を形成してきた。
* われわれには自国を守る万全の安全保障と国際社会で国益を追求できる能力が必要である。
* プーチンの国家観によれば、ロシアはあらかじめ偉大な国家であることが運命づけられているのである。ロシアはロシア民族とロシア正教会を中心とする多民族国家である。ちなみに、ショイグ国防省はとトゥーア民族でありラブロフ外相はアルメニア民族。

**ウラジミール大公像除幕式でのスピーチ**

* 2016年11月4日、ロシア帝国の基礎を作ったウラジミール大公(955年~1015年)の立像の除幕式でのプーチン大統領のスピーチ。
* キリスト教は、ロシア・ベラルーシ・ウクライナの民に共通する精神の源である。道徳と価値観の基礎である。
* ロシア・ベラルーシ・ウクライナは同じ神を奉じる東スラブ民族が構成する「歴史的ロシア」として一体でなければならない。そしてロシアはその盟主である。
* われ思うに、「現人神を中心とした大東亜共栄圏、五族協和。亜細亜の盟主は大日本帝国である」との思想にとても似ている。

**ウクライナ侵攻へ**

* 2022年2月24日のウクライナ侵攻直前の演説で、プーチンはウクライナは歴史上、真の意味で「国家」だったことがないと述べている。
* どういうことか。プーチンの理解によれば国家には2種類あり。完全な主権を有している国家。アメリカ、中国など。不完全な主権しか有していない国家。日本やウクライナなど。日本もウクライナも自国を自分で守れない国家。(日米や安全保障条約)
* このような国家観をプーチンは持っている。われ思うに、これも大日本帝国の思想に似ている。「国家には優等国と劣等国あり。優等国は盟主となって劣等国を導いてやらなければならない」
* プーチンはソ連時代に諜報官僚として出世していった人間だが、共産主義には否定的な考え方をもっている。すなわち、文明の王道から外れた国家であったと。共産主義は宗教を否定、民族よりもイデオロギー優先。
* プーチンはソ連への郷愁はなく、むしろ帝政ロシアへの郷愁が強いのであろう。つまり、他民族を飲み込みながら領土を拡張する帝国主義。領土拡張の衝動を抑えられず外敵への異常な警戒心が攻撃性という形で現れてしまっている。
* しかしながら、プーチンが思い描く「偉大なロシア」は、GDP は米国の10分の1しかなく、1人当たりGDP はG7諸国平均の5分の1しかないという惨めな状況にあることを認めざるを得なかった。経済の建て直しだ！　これがプーチン政権の重要な目標となった。
* プーチンは石油、天然ガスそしてオリガルヒ(新興成長企業)により、ソ連時代にボロボロになった経済を立て直した。これがプーチンの人気につながっている。

**次に、核問題**

**ソ連からロシアへ核のボタン移管式**

* ソ連崩壊のときに「核のボタン」はどうなったのか。
* ロシア共和国その他ソ連構成国は、ソ連からの離脱を決定したことにより、ソ連という国家は消滅した。このため、ソビエト連邦大統領ゴルバチョフは1991年12月29日に辞任せざるを得なくなった。
* この辞任を受けて、ゴルバチョフからエリチンへ「核のボタン移管式」が予定されていたが、ゴルバチョフのエリチン批判のスピーチに怒ったエリチンは移管式に「俺はイカン！」といってエリチン欠席のまま式はとり行われた。
* これは「核」が軽々しく取り扱われた第一歩。

**冷戦終結とMAD政策の破棄**

* 米ソの冷戦時代には核攻撃は「やったらやり返かえされる」状態にあったため、米ソ間では核兵器の先制使用がうまく抑制されていた。この防衛政策をMAD相互確証破壊という(Mutual Assured Destruction)。
* 逆に言うと、「やってもやり返されない」のであれば「やってしまおう」となる。
* パパ・ブッシュ大統領は「もはやロシアは敵ではない」という認識でこの政策を放棄した。
* 放棄したあとどうするか。米国はミサイル防衛網計画を推し進めた。飛んできたICBM は撃ち落とす。これにより、「やってもやり返されない」状況をつくる。
* ロシアもプーチンの下で核兵器の近代化を進めた。
* 2018年3月にはプーチンは以下のような演説をしている。
* ミサイル基地がルーマニアやポーランドに出現している。
* 我々はこれに対抗して核兵器開発を進めてきた。それが多弾頭のICBM「サルマト」、原子力推進の巡航ミサイル、核弾頭搭載の魚雷型ミサイル、超音速核搭載ミサイル「キンジャール」である。
* プーチンは言う。これまで誰もロシアのいうことに耳を傾けなかった。ロシアは世界最強の核大国である。今こそ聞くがよい！　ロシアの核兵器はこけおどしではない。

**プーチンの本気度**

* ロシアは2020年6月、核兵器使用の指針を公表した。プーチンの核による威嚇の現状を見ると、この指針はプーチンの手足を縛るというより「このような場合になったら積極的に核兵器を使うぞ」との脅しの意味がある。
* 敵国が弾道ミサイルを発射したとの情報があった場合
* 敵国が核兵器その他の大量破壊兵器(生物化学兵器など)を使用した場合
* 敵国が核兵器関連の重要施設を攻撃した場合(破壊されると核兵器による反撃ができなくなるような重要施設)
* ロシアが国家存亡の危機に直面した場合
* 2022年1月米英仏中露は「核戦争の防止と軍拡競争の回避」というタイトルの共同声明を発表した。なおこの声明は、ロシアの提案でなされたものだ。
* 最も重要な責任は核保有国同士の戦争の回避と戦略的リスクの低減である。
* 核戦争に勝者はない。
* 核兵器は防衛が目的である。
* 核兵器は侵略の抑制と戦争の防止のための手段である
* 核による威嚇に反対する。
* その翌月、2022年2月7日、プーチンと仏マクロン大統領は会談を行い、そのあとの記者会見においてプーチンは次のように言った。
* ウクライナがNATO に加盟してクリミア奪還のため軍事力を行使したらNATO 諸国はロシアとの戦争に巻き込まれるのだ。ロシアは核大国であることを忘れるな。
* NATOも核を保有している。この戦争に勝者はない。(だからNATOはウクライナに手を出すな)
* プーチンのこの発言は核攻撃の可能性を匂わせたものととらえることができるだろう。

**喉に突き付けられたナイフ**

* INF中距離核戦力全廃条約は2019年に失効した。
* これは条約に基づき米国がロシアに失効を申し入れ、その6ヶ月後に失効となったもの。
* 条約失効により射程500～5,500km の核ミサイルを配備することが可能となった。
* ウクライナ国境からモスクワまでたったの500km。超音速ミサイルなら4、5分で到達する。
* プーチンいわく「ナイフを喉に突き付けられた状態」。しかしそれを言うなら軍事的リスクはウクライナのNATO加盟だけではない。バトル三国もフィンランドも同じ。実際、フィンランドは NATO 加盟に方針を変更した。(最新のニュースではフィンランドのNATO加盟が認められた。)

**ウクライナ侵攻**

* ウクライナ侵攻直後の2月27日、プーチンは戦略核運用部隊を特別警戒態勢の状態に置いた。
* これと並行して露・ネヴェンジャ国連大使はウクライナによる生物化学兵器使用の可能性を繰り返し述べている。仮にそうなれば、ロシアの核兵器使用指針に該当し、ロシアによる核兵器使用の口実となる。
* ロシアの工作員によりでっちあげられた生物化学兵器使用を口実にロシアは核兵器を使用する恐れがある。
* 今年の2023年3月時点でプーチンはベラルーシに戦術核兵器配備を決定した。(本書の範囲外だが)
* バイデン政権は、プーチンはウクライナに対して核兵器を使うかもしれないと考えている。これに対し、プーチンは米国はロシアに対して核兵器を使わないと考えている。
* この認識のギャップは、プーチンの恫喝は一定の効果ありということなのか。米国はプーチンの恫喝におびえてウクライナへ戦闘機や長距離ミサイルの供与に踏み切れていない。
* ウクライナ侵攻から4ヶ月たった6月23日、核兵器禁止条約の第1回締約国会議が開催され、ウィーン宣言を採択した。
* 「いかなる形であれ核の威嚇を非難する」との文言は入ったが、ロシアを名指しすることはベネズエラ、南アフリカ等の反対で実現せず。実際にロシアは核の威嚇を行っているにもかかわらずである。
* アメリカの核の傘の下にある日本は、オブザーバー参加も見送った。国際的な場で核問題に対して積極的な姿勢を見せられていない。

**原発への軍事攻撃**

* 1986年(当時はソ連)、チョルノービリ原発で大規模事故発生。原子炉が爆発、31人死亡。現在も半径30km以内立ち入り禁止となっている。300年間は人が住めないと言われている。
* ウクライナ侵攻直後、ロシア軍はこれを占拠した。ロシア軍は放射能の怖さにあまりにも無頓着。
* 激しい吐き気等の症状を訴える兵士が75人出たと言われている。
* 3月4日にはサポリージャ原発を攻撃、占拠した。
* 原発への軍事攻撃は歴史上初めて。原発を砲撃する映像に全世界は第2のチョルノービリ原発になるかと恐怖した。
* 米・国連大使は「信じられないほど無謀で危険」とロシアを非難。これに対して露ネヴェンジャ国連大使は「ウクライナの核による挑発を防ぐための措置であり、火を放ったのはウクライナ側だ」と反論した。
* ロシア軍は核に対してあまりにも無謀、軽率。核を軽々しく扱っている。

まとめは、以上。

さて、

以下の2点は、米英などNATO諸国において検討されているはずと思います。

あなたはこの2点についてどのように考えますか？

1. ウクライナ戦争においてロシアが核兵器を使う可能性はどのくらいあると思いますか。
2. もしロシアが核兵器を使ったらNATOあるいは米英など各国政府はこれに対してどのような対抗措置を取ると思いますか。（例えば、米国からウクイナへ長距離ミサイル供与？　米国による核兵器での報復?　などなど）

以上